

ピアノのレッスンといえば、ソロ曲がメインである。それは今で も変わらないが、最近は連弾で他人とあわせたり、他楽器との アンサンブルを積極的に取り入れる指導者が増えている。そこ には、音楽の幅を広げようという意識の高まりが感じられる。

しかし問題が一つ、それは「目的にあった楽譜があまりない」 ことだ。過去の作曲家が残した楽曲の中には、素晴らしい連弾 譜やアンサンブル曲が多くある。しかし今小中学生のレッスンで 望まれているのは、「普段から馴染みのある曲で、色々なバリ エーションを体験すること」なのである。例えばソナチネ、バイエ ル、ブルグミュラーといった、誰もが習う楽曲をそのまま使ってア ンサンブルができれば、他楽器と合わせる経験を得る同時に、 ソロ曲の理解もより深まることだろう。

幸い、昨今そのような楽譜が市販されるようになったが、まだ 十分網羅されているとはいえない。そこで指導者が自分自身で 編曲するか、アレンジのアイディアをプロの作曲家に実現しても らうことができれば、さらにレッスンの可能性は広がるだろう。

本特集では、「編曲」を取り入れることによって、レッスン内容 が豊かに発展している事例をご紹介する。

Webで一部映像公開!



# ピアノ指導者と作曲家のコラボレーションがもたらすもの

# ~ソロ学習に生かせるピアノトリオ曲を依頼



江崎 光世先生 運営委員・指導法研究委員・コンクール事業担当者連絡会委 員・課題曲選定委員長・新曲課題曲選定委員・ステップオブ ション企画委員

# ソロの曲を立体的に読むために

一昨年末に開催されたアンサンブル・フェスティバル (12 月27日・アンサンブル・アソシエ主催) は、4手から2台8手連弾や弦・管楽器とのピアノトリオが取り入れられたオリジナリティに富んだ演奏会でした。この為に編曲された、ピアノトリオ曲についてお聞かせください。

今回は単なる他楽器との合わせではなく、「ピアノを学ぶ子供たちにアンサンブルテクニックを学んでほしい」という目的がありました。

まず、ピアノの生徒は楽譜が立体的に読めないという問題点があります。例えば独奏曲を弾いていると、対話フレーズになっている箇所、旋律が幾重にも美しく重なっている箇所、左手の内声で歌わせる箇所等、なかなか気づかないのです。そこで管弦楽器を入れて、フレーズを会話風にしたり、違う楽器でフレーズを際立たりすると、ソロの曲でも立体的にとらえ、スコアリーディングのように読めるようになってくるのではないかと望んでおります。



▲室内楽体験会の様子。感覚で覚えるのが、アンサンブルの第一歩。

また、これまでアンサンブル的な要素は連弾で補っていて、他人と呼吸を合わせることや、他人の音を聴きながら自分の音のバランスを取ることはできるようになりました。そこで「アンサンブルをする」という段階から、今度は弦や管楽器の音を知り、ピアノとは異なる発音法や呼吸のタイミングを感じながら演奏し、音色に敏感に反応するということを学んでほしいと思いました。

# レッスンで使うソロ曲をトリオで演奏

ーピアノトリオは江崎先生のアイディアで、作曲家の小山 和彦・轟先生が書き下ろされたそうですが、バッハやブルグ ミュラー、チャイコフスキー等、誰でも知っている曲ですね。

いつもレッスンで扱う曲だと、ソロとトリオの違いが分かり やすいですね。今回は弦楽器の響きの持続性を理解してもらうために、リズム重視の曲よりも歌う曲を多く取り入れました。

既成のピアノトリオ曲は、弦楽奏者同士が交代しながら ソロパートを受け持つのが主流で、ピアノは伴奏という印象 がありました。しかし今回は三者ともにメロディ、伴奏、オブ リガートの部分を入れて頂きました。今自分は旋律なのか、 ヴァイオリンとチェロの旋律を支えているのか、内声でハー モニーを奏でているのか、リズムを刻んでいるのか、そうし た楽譜の中の役割が明確に解るようになります。いろいろ お願いして出来上がった曲は想像以上に素晴らしく、子供 たちがイメージをつかみやすい物語風なアレンジにより、大 人でも十分に楽しめる作品に仕上がって大感激でした。

一同じ曲を、別の楽器の組み合わせで編曲、演奏されていました。 面白い試みですね。

楽器が異なれば、響きも違いますし、各楽器の特徴を取り入れるとアレンジも変わります。例えばヴァイオリン特有の奏法を入れたり、フルートのタンギングを入れてみるとか。

フェスティバルの時は、チャイコフスキー『フランスの古い歌』を、「」ピアノ・チェロ・ヴァイオリン、「ピアノ・チェロ・フルー

# 編曲で広がるレッスンの可能性

ト」、2つの組み合わせで発表しました。

また同じメロディを異なる楽器で弾いてみると、音楽全体 のイメージが変わりますね。

# ピアノの学習にどう還元するか?

一アンサンブルを通して、他楽器の奏法から学んだことは どのような点でしょうか。

ピアノと決定的に違う点は奏法です。弦はボーイング、管にはブレスのタイミングがあること。 つまり弦は弓をうごかしてから、管は息を吹き込んでからでないと音が出ません。 どのようなタイミングで弾けばどう合うか又どう響くか、 を感覚でつかんでもらいたかったのです。 弦楽器からは持続音を、 管楽器からは呼吸の大切さが学べたと思います。

例えば弦楽器のボーイングというのは、ピアノでは腕の動きに似ています。弓のボーイングは、ピアノに置き換えると、一つの腕の動きの中に一連の音を入れるのと同じですね。 息の長いフレーズ感に通じると思います。

一方、管楽器は呼吸が命ですね。ドビュッシーの『ゴリウォークのケークウォーク』は、クラリネットとファゴットとのトリオでしたが、休符がたくさんあるにも関わらず、合わせやすかったようです。

こうしてアンサンブルを通して学んだ**アンサンブルテクニック**を、ピアノソロ演奏に還元できるように意識してほしいと願っています。

▶ <ピアノ学習者のための室内楽導 入シリーズ vol.1>~ピアノ独奏曲を ピアノ三重奏で~」(東音企画出版) には、シューマンの「楽しき農夫」や 「勇敢な騎士」、チャイコフスキーの 名曲が収録されている。

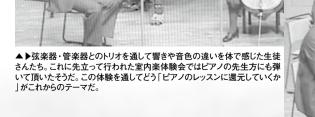
―リハーサルではどのような感じでしたか?

子供は吸収が早いので、ほんの15分くらいでもどんどん変身していきます。連弾で培った呼吸のおかげか、管楽器の先生から「呼吸がしっかりできている」とほめられた子もいます。また昨年10月には先生方にも室内楽を体験して頂きました。音楽のとらえ方、楽譜の見方が色々変わったようで、あるベテランの先生から「オーケストラの聴き方が変わった」というご感想を頂いて嬉しかったですね。

これまでは、他楽器の奏者の方々からアンサンブルテクニック不足のピアニストの苦情が問題点でした。そのためにも今までの音楽教育とは違うアプローチを探っていかなければと切実に感じていましたが、こうしたアンサンブルを小さい時から体験させて、独りよがりではない豊かなピアニストに育って頂ければと思います。

今後は打楽器を使ったピアノアンサンブルを企画中です。 打楽器から弾みのあるリズム感を頂きたいものです。





# 指導者のアイディア満載! ソナチネ2台ピアノ譜

~ 2 台でアンサンブル的な効果を出すために



池川 礼子先生 ステップオプション企画委員会委員長・運営委員・指導法研 究委員会チーフ(初級)・室内楽・協奏曲委員・ステップ担 当者連絡会

# 単なる伴奏付けではない、ソナチネ編曲

ーまず、近日出版予定のクーラウのソナチネ2台ピアノ用 編曲譜について、書かれたいきさつなどをお聞かせくださ い。

日常のレッスンの中でなるべくアンサンブルを取り入れようと常に思っています。導入期はバスティンのフロッピーに合わせ、ブルグミュラーやソナチネになると、2台ピアノ譜のセコンドを加えたりしていました。そのことにより自分の弾いた音楽がさらに広がり、聴くことや、息を合わすことも自然とできるようになります。指導者の伝えたい音楽の意図がより伝わり、しかも心のコミニケーションが図られてお互いとても楽しいです。

ソナチネは6曲だけしか編曲されていなかったので(アルフレッド・バトラー編曲。現在は廃版)もっと多くの曲で楽しみたく思い、自分で書いてみることにしました。

### ―どのくらいの期間で書き上げたのでしょうか?

書き出すと面白くなります。発表会で演奏したいと思い、 1ヶ月弱で約3曲(第1,5,6番全楽章、4番は1楽章のみ) を書いたと思います。しかも前日まで、修正などしていました から、たいへんでした。期限があったから何とか仕上げるこ とができ、その後レッスンで使えるようになったわけです。

### 一工夫された点を教えてください?

生徒どうしの連弾もレッスンで取り入れたいのですが、適

当なレベルの子の時間を合わせたり、連弾のためのテキストをレッスン曲に加える時間的な余裕がありませんでした。そこで、いつもレッスンで弾いている曲はそのままで、そこに2台ピアノを加えることがまず条件でした。できればオーケストラが加わったのように聴こえ、またセコンドが盛り上げてプリモをのせ、スケールが大きく感じられるようにと意識しました。コンチェルト風に、掛け合いや、二重唱、テュッティー、ソロの部分などを入れたいと考えてはいたものの、もともとそういう風に作られているものではないので、難しいものですね。

また、生徒に相手の音もよく聴くようにという意味で、オブリガート的な、新鮮なメロディーも加えたいと思いました。

# 「必要な音」を書く難しさ

今回作曲家の小山和彦先生にたくさんアドバイスを頂きました。たとえば、1ページ目の5~8小節目は、チェロの音色を意識して低音を使ったのですが、2台で合わせると響きが低く厚くなりすぎるので、オクターブ上に移行させては?とか。13~14小節目では、一瞬音が濁るということで、それなら、「この音は?」「これならどう?」などと模索して音を変えたりしました。大体オーケストラをイメージしているので、音が多い!余分な音も多かったようです。これは性格でしょうか?(笑)

ーピアノの演奏上入れたい要素と作品の構成上省いた 方が良い要素とがあるのでしょうね? 新たに得られた視点 はありますか?

いろいろ勉強になりました。一つに「和音の転回形が持っている独自の響がある」ということ。第2ピアノが異なる展

# 編曲で広がるレッスンの可能性

開形を使うと違う響になってしまいます。

# 作曲家と生徒の間で、ピアノ指導者が橋渡し役に

―ところで編曲をされるにあたり、どのような勉強をされましたか?

特に作曲の勉強はしていませんが、指導者になったばかりの頃、武田宏子先生(ピティナ監事)が企画された勉強会で嵐野英彦先生(ピティナ理事)から、アナリーゼの指導を受けました。ブルグミュラーやグルリットなどを用いて、和声や、使われている作曲技法などについて、楽曲分析をしました。これが大変指導にも役立ったと思います。

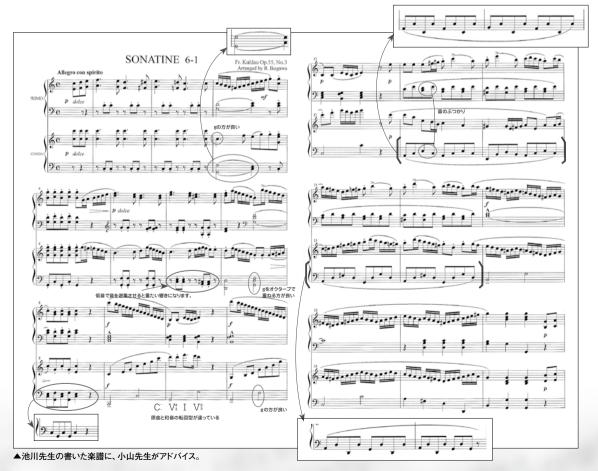
▶ピティナ主催の室内楽研修会にもほぼ毎回参加 し、自らアンサンブルを体験なさる池川先生(右写 真:2002年に鹿児島で行われた室内楽研修会よ り)。他の楽器とアンサンブルしているような感覚を 生徒に持たせたい、というのもこの2台ピアノ譜を 書いたぎっかけとなった。

また2台8手や4台8手の、子供用が弾く適当な楽 誰も数少ないと指摘する池川先生。作曲家の三上 次郎先生(長崎大学教授)に依頼して書き下ろしし ていただいたこともあるそうだ。 ただ音を弾くのでなく、作曲者が意図したところを読み取り演奏に生かせるように指導するには、その意識と知識を生徒たちに伝えていかなければならないと思います。

作曲家の先生たちの視点から見る楽曲の捕らえ方が、ピアノ指導者を通して、さらに生徒たちに還元していければと思います。

ーピアノ指導者と作曲家がコラボレーションすることで、ピアノ指導の可能性はもっと広がりそうですね。







# ■作曲家が語る未来のピアノレッスン 1

# ピアノ指導者の要望を、 作曲家が実現!



小山 和彦先生 作曲家、宮城学院女子大学音楽科助教授、 国立音楽大学講師

# 各楽器特有の奏法を取り入れる

一小山先生編曲のピアノトリオ作品は、ピティナ・ピアノステップでも演奏されていますが、このアレンジは江崎光世先生からの依頼ですね。

江崎先生からは、子供達になじみ深く、レッスンでよく扱う作品を、ピアノトリオに編曲して頂きたいと依頼されました。

今までのピアノレッスンの問題点は、例えば「チェロのような音色」と言葉で説明しても、実際に間近で聴いたことがないので、音色が分からないという点だったそうです。そこで実際一緒にアンサンブルをして、弦楽器や管楽器の生の音を理解してもらいたい、という希望がおありでした。私自身アンサンブルを作曲するときには常に念頭に置いていることですが、今回はお互いに対話するような感じをより意識しました。

ーピアノ奏者にどのような響きを感じさせるよう に編曲されたのでしょうか。

特に子供のうちは、弦楽器独特の奏法、例えばフラジョレット(倍音奏法の一種で清澄な響きがする)、コル・レーニョ(弓の木部で弦をたたいて音を出す)等の音を間近で聴く機会がなかなかありません。弦楽器は色々な音が出るので、それを体験してほしいと思い、数箇所そのような奏法を盛り込んでみました。

一作曲家ならではのアイディアですね。今回 のコラボレーションは、ピアノ指導者と作曲家、弦 楽奏者が見事に一体化した形でした。

ピティナの指導者は、どうしたら生徒が伸び ていくかを常に考えていて、素晴らしいと思いま す。こういった編曲は指導者の先生方のご依頼 を受けてできあがったものです。最近こうした編 曲が増えているとしたら、それは先生方の向上 心が背景にあるのではないでしょうか。

ーピアノ指導者の要望を、作曲家が汲み取っ て高度な作品に仕上げ、レッスンに還元するとい うのは一種の理想ですね。

例えば歯科医では、入れ歯等は歯科技工士 に外注しています。ピアノのレッスンで必要な教 材は、個々の先生方、生徒さんによって違ってき ますから、必要な曲の作曲、アレンジなどは外注 することがもっとあっても良いのではないでしょう か。

# 音から思考を組み立てていく作業

ーピアノ科出身の先生も、和声など基礎知識 があれば、編曲は可能でしょうか。

編曲や作曲というのは、実は決して難しいものではありません。言葉にたとえて考えると、読み・書き・話し・聞くという、基本技能の内の一つです。

生徒から「こういう曲を弾きたい」というニーズ が出たときに、編曲ができるといいですよね。そ のために、例えばメロディに対して単音で対旋



律風のバスを書いてみる等、少しずつトライしてみるとよいでしょう。

一先生は子供のレベルに合わせた編曲も多く手がけて いらっしゃいますね。

この指のポジションだけでできる曲というふうに書いていきます。例えば手が小さいからオクターブは使わない、筋力がない子は二音だけ、といった具合です。

依頼主の意見・要望・条件を細かに聞いて編曲しています。

### ―編曲の第一歩として、役立つことを教えて下さい。

いろいろな作曲家の作品を研究してみると、より理解が 深まります。例えばショパンは音の高低や前後の脈絡に よって微妙に音の重ね方を変化させています。彼の作品 からは音をどのように配置したら響きが良くなるのか、大

いに考えさせられます。一概には言えませんが、ワルツを書きたければショパン、初心者向けのメヌエットであればバッハのアンナ・マグダレーナのための小品集等、編曲したい曲のスタイルやジャンルに合った分析をするとよいと思います。

# 目的に合ったアレンジか

ー編曲楽譜が多く市販されていますが、質の見極めが難しいですね。既成の編曲作品を正当に評価できる力も必要と思います。

たしかに編曲や作曲に対しては、リア ルタイムでの定まった評価がありません。 見極めは難しいですが、弾きやすいか どうか、何らかの目的があるアレンジなの か、その目的に合っているか、というのが 一つの判断基準になるでしょう。

しかし、弾きづらくてもそれが楽曲の中で必然とされる場合もあります。例えばベートーヴェンの作品には、急激なポジションの移行が見受けられますが、それは音楽的な欲求から生まれたものです。技術というのは、作曲者や編曲者の「こ

うやりたい」という意図に合わせて出来上がっていきます ので、必然性があるかどうかは実際に弾いてみないと分 かりません。

一方、初心者向けの教材でドソミソドソミソ・・・等のアルベルティ・バスが無造作に続く伴奏譜を見かけることがありますが、残念ながら曲のスタイルに合っていない例も多いですね。

編曲とは、ある決められた枠の中で、どれだけ様々な手段を使って、多様な響きを作り出せるかが醍醐味なのです。

▶シューマンやチャ



# 簡単なフレーズに、 こんな素敵な伴奏付け!

# ~未知の和音を求め、演奏家や作曲家とも交流



佐藤 由有子先生 KOBE風見鶏ステーション代表、神戸女子短期大学非常勤講師

# ステップに向けて35曲の伴奏譜書く

一昨年12月4日に開催された神戸東ステップ (KOBE 風見鶏ステーション主催) では、生徒さんが管楽器の伴奏をするという、新しい趣向のものでした。 佐藤先生がほとんど編曲なさったのですよね。

いずれも初~中級レベルの簡単な楽譜ですが、合計で35曲編曲しました。ステップの3ヶ月ほど前に着手し、約1ヶ月間で書き上げました。

編曲は漫然と曲を書くわけではなく、目的がはっきりしており、そこに音符やリズムを当てはめていく作業です。そこで、各生徒の進度に合わせて少しずつ課題を盛り込んでいます。たとえば「○○ちゃんは6度奏をやったことないから、今回はちょっと頑張りましょう」、「△△君はリズム感を養う曲がいいかな」「□□さんにはアルペジオを課題にして」、まだ指の小さい子に対しては「1と5だけを使って、あとはスタッカートを綺麗に入れる」というように。各自の課題にぴったりのアレンジが出来たり、実際に弾いた生徒に良い効果が現れたりすると、嬉しいですね。

市販されている出版物に間違いを見つけることもあります し、生徒のレベルに合った楽譜が入手できない場合もありま す。ですので自分にとっては、編曲は楽譜を探す作業よりも 楽ですね。

ただ原曲には決して手を加えません。作曲者に敬意を払い、弾けるレベルに達するまでは別の教材を使って力をつけるようにしています。

一今回はクラリネットやフルートなどの管楽器とのアンサン

ブルがメインでしたね。

発声の良い楽器と一緒に演奏させたかったのです。初体験の生徒は、最初は止まらずに弾き続けることが大変そうでしたが、慣れてくると楽しみながら、相手の音も聴きあうことができるようになりました。そのうち弦楽器を入れようと思っています。他楽器もきちんと勉強しないと編曲できませんが、段階がありますので少しずつバリエーションを増やしていければと思います。

# 数をこなし、少しずつ響きのよさを追求

―編曲や即興演奏というと、「センスが無いから無理」と いう声も多そうです。

私も20代の頃、良かれと思って書いたものが、本番に音を出して初めて、響きが悪いことに気づいたことがありました。後から譜面を見たら、禁則事項である平行八度をいくつか使っていたことに気づきました。勉強したことが反映されてない、と反省しましたね。

でも、ある程度和声の基礎知識があれば、頭の片隅にあった知識を呼び戻して活用すればよいのです。失敗は成功のもとですから、やっているうちに慣れてくると思います。

―編曲を始めたきっかけを教えて下さい。

小さい頃からC Mソングを聞いては遊び弾きをしたり、小学校でクラスの伴奏をするようになりました。ある日伴奏のパターンを色々考えていたら、たまたま右手 (ラソファミレ)・左手 (ラ りシ はシ #ドレ) を同時に弾いたのです。その響きは当時の私にとって、大変な驚きでした。それ以来シャープやフラットに対する感覚が少し鋭くなったと思います。「半音の世界」は奥が深く、今でも追求し続けています。

大学ではリトミックを専攻し、ピアノ実技のほか、即興演奏 や作曲も勉強しました。実は昨年夏から、知り合いにご紹 介頂いた作曲家の先生に月1回習いに行っています。先生



▲クラリネットとのアンサンブルで、「10人のインディアン」を演奏。ステージでの挨拶マナーや出だしのタイミング、呼吸の取り方など、練習を通して覚えていった。ステップ参加から約1ヶ月、久々のアンサンブルに少し緊張気味!?

▶パイプオルガン奏者の山口さんと。映画音楽を何曲かり クエストすると、その場で見事な即興連弾をして下さった。



### ☆素 編曲で広がるレッスンの可能性



▲和音中心の編曲。これは大人になってピアノを始めた 生徒さんに対して書かれたもの。子供のころに電子オル ガンを習っており、その時覚えたコードネームのおさらい も善れている。



▲この曲は6歳の男の子のためにアレンジ。はぎれの良いスタカート奏と拍(強拍・弱拍)の意識づけのために、このような伴奏形にしたそうだ。どの楽器と合わせたいかは、生徒本人の希望に任せた。CDで音色を聞かせて好きなものを選ばせた生徒も。



▲神戸東ステップでは、管楽器の伴奏に徹した生徒さん達。脇役としての弾き方やマナーを学んだ。



▲シアターオルガンとは無声映画の時代、演出するために使われたパイプオルガンのこと。ソロ演奏にも使われる。パイプのほかに打楽器やピアノがつながっており、すべてを演奏中に演奏台からコントロールできる。

は現在75歳なのですが、クラシックのみならずジャズやポップスも弾く方です。先日も「メロディーにはドミソしか使わないピアノ曲をつくる」というテーマで4時間レッスンして頂きました。楽曲分析が鋭く、たとえば「Ich liebe dich(私はあなたを愛しています)」という同じ題名でも、ベートーヴェンとグリーグでは音楽が違う、といった解説して下さいます。

# シアターオルガンの演奏も

現在シアターオルガンの勉強と演奏もしています。先日も

コンサートに出演したのですが、10小節程度の簡単なフレーズを、様々に変化させて30分続けて演奏するのです。 楽譜には基本フレーズを書いただけなので、多彩な和音や リズムパターンの蓄積が必要になりますね。

またパイプオルガン奏者の山口綾規さん(指導者会員)と も、よく即興連弾をします。自分にない和音を持っている人 と知り合うと、音楽の世界がどんどん広がりますね。

# 演奏と作曲を同時進行!見えてくる視点の違い

# ~「自分で音を作ること」が生みだす効果



守 麗子先生

# この子がこんなイマジネーションを!

一今年2月のステップに参加予定の、3名のレッスンを見 学させて頂きました。和声や即興演奏、自作曲のアドバイス 等、盛りだくさんですね。

指導を始めた当初から、作曲や編曲、即興演奏をレッスンに取り入れています。他楽器や声楽とのアンサンブルで作曲してもらい、毎年発表会で発表しています。歌は詩がありますので、生徒にとっては一番作りやすいようです。日本の有名な詩歌、あるいは英語の教科書の邦訳を使う生徒もいます。それぞれイメージを膨らませやすい素材を自分で選んでもらいます。同じ詩で曲をつけてもらうこともあるのですが、先日『海の子守歌』という詩を生徒二人に出題したところ、一人は長調、一人は短調で作曲してきました。二人の

▲生徒の自作曲にアドバイス。「ここはこうした方が響きが綺麗だと思いますよ。」「この音程だと歌の人が歌いにくいんじゃない?」実際のアンサンブルを想定しながら楽譜み書き込む。

頭の中にある映像が、全く違うのですね。

一即興もレッスンに取り入 れていますね。

即興演奏は毎回レッスン でやりますし、発表会でも 行います。以前はグランド ピアノ3台を使用し、6人



▲のびのびした環境で、レッスン室も 広い。成田衣里さん(中央)は2004 年度デュオ部門とグランミューズ部門 で本選出場した。御園奈美さん(右) は初等教育を学んでいる。

で即興演奏を行いました。テーマはその場で「夕焼け小焼け」と決め、「あなたはテーマ、次は6/8拍子、次は短調で・・」という具合にざっくりと役割分担した上で、そのまま舞台にあがって弾いてもらいました。2周回ったのですが、色々な夕焼け小焼けの音楽が出てきて、それは面白かったです。今年2月のステップでも挑戦しますが、その場でアドバイザーの先生にテーマを決めて頂く予定です。果たしてどんな音楽が出てくるでしょうか・・・?

# クラシックで覚えた和音を引き出して

一普段はクラシックの作品も勉強されているのですよね。

はい。普通のクラシックの作品を勉強し、そこで覚えた和 音やフレーズを、即興演奏や編曲の際に出そうとするので すね。

一頭の中に蓄積した和音をいかに瞬時に鍵盤で出せる か、即興演奏はよい訓練になりそうです。

大学生のお二人はクラシックのルールに則って演奏している感じですが、小1の生徒さんは完全に自由な発想に任せているという印象がありました。

まずは頭の中にあるアイディアを、全て出させることを意識しています。小1の子は何も考えずに頭に浮かんだことをサーっと音にします。発想が自由なんですね。この子の場



◀和声進行の 宿題をチェック する守先生。

合は、「宇宙」、「UFO」、「嵐」、「携帯電話」等、何か強く インスピレーションを起こさせる言葉に鋭く反応します。音楽 も、現代音楽ぽいものですね。

一何かを表現したい、という意欲を強く感じました。 作曲 や即興演奏などをしていると、 感受性や表現意欲が大いに 刺激されるように思います。

# 演奏と作曲、二人の先生の相違点は?

―ところで初等教育を専攻されている御園さんは、現在 ピアノ演奏専門の先生と守先生に師事されているそうです が、お二人のご指導には違いがありますか?

御園さん:ピアニストの先生は、聴いている人がいて初めて演奏が成立する、ということを意識したご指導をなさいます。守先生は、和声的な知識をもって曲自体を分析したり、作曲家による違いを理論的に説明してくれます。ですので、曲の構成を考えながら弾けるようになりました。例えば、耳



# 編曲で広がるレッスンの可能性



で聞いて楽譜を見て「ベートーヴェンはすごい」と思っていましたが、和声の流れや、なぜここでこのテーマが生まれるのか、といった点を論理的に説明して下さることで、ベートーヴェンの真の凄さが理解できたように思います。また自分で作曲をしますが、苦労して自分の譜面を書いた後に普通の曲を弾くと、作曲家の偉大さが実感できます。

また守先生は型にはめないで個人の感性を尊重してくださるので、その生徒独自の音楽性が出てくるレッスンだと思います。





# ■作曲家が語る未来のピアノレッスン2初~中級のピアノ指導者に求められる編曲の技術



橋本晃一先生 作曲家·編曲家

# 編曲は特殊な作業ではない

一最近、ピアノ指導者自身が編曲を手がける ケースが増えてきました。これは歴史的にみて、 新しい傾向でしょうか。

ピアノを弾く以外の行為にも取り組むというのは、「音楽をする」という本来の形に戻っているのではないか、と思います。

ベートーヴェン以前の時代は、作曲家とピアニストは一緒でした。つまり演奏家は作曲や即興演奏も同時にしていたのです。しかし、時代とともにピアニストが職業化されて作曲家と分離していく中で、ピアノのレッスンも「演奏」の部分だけを補うようになってきました。つまり、「ピアノを弾くこと」を目的としたレッスンに特化するようになってきたのです。

クラシックのピアノ曲を弾くのに編曲は必要ありませんが、 最近はジャンルが広がりポピュラー



曲を好む方も増えてます。そういったものをピアノ で演奏するためには編曲は不可欠です。

また作曲家がシンフォニーを書く時は、ピアノス ケッチやピアノスコアを書いた上でオーケストレーションしていきます。そうした点から言えば、編曲 は作曲という作業の中の大きな一部といえます。 また例えばオペラやコンチェルトの練習などで、 オーケストラの部分をピアノで弾く際にも、編曲と いう作業が行われます。

音楽全般から考えると、編曲はどこにでもある ことです。クラシックのピアノレッスンの世界では、 それなく済んできたことがむしろ特殊であるとい えるでしょう。

# 扱うジャンルの拡大にともなって

ーピアノの先生方もこれからは編曲の技術が あった方がよいということですね。

編曲が必要とされているのは事実です。一つには、レッスンで扱うジャンルが従来に比べると広がっている点。以前のレッスン曲は古典派が中心でしたが、現在ではバロックから近現代までというのが一般的になっていますし、さらにクラシック以外のジャンルのものもレッスンに登場するようになりました。原曲がピアノ独奏用でなければ、当然編曲が必要です。

もう一つは、かつてピアノレッスンはバイエルからスタートして、道筋が決まっていました。決まったカリキュラムをこなすことが良しとされ、面白いかどうかは二の次、苦労しなければ報われないという時代でした。しかし現在は、最初から音楽を音楽として楽しめるように、という考え方が一般的です。

それなのに、特に初級から中級レベルにかけ ては、その目的に見合った曲が十分あるとはい



えない状況です。

ベートーヴェンやショパンが子供向きの曲を作ってくれればよかったのですが(笑)、シューマンやチャイコフスキーの子供のための作品でも初級向きとは言えません。そこで、現代の先生は足りない部分を補う必要があるのです。

児童対象の教材は多く市販されていますが、生徒一人一人にとって適切かどうか先生が見極める力、あるいは先生が編曲することで足りない部分を補う力が、求められています。

編曲は、特に初級・中級レベルの現代の生徒に応じる ために、必要な力と言えるでしょう。

# クラシックにも応用できるコード

ーピアノ指導者に、さらにこういう知識があればよい、というのはありますか?

コードですね。私自身は学生時代、和声学や対位法などの作曲理論を勉強しましたが、現在仕事をする際に、コードの考え方を使うことが多いですね。その方が応用が利くのです。

とはいえ、学生時代はコードのことは詳しく知りませんでした。仕事として必要な楽譜を書くために、誰に習うという訳でもなく、学生時代に習った和声の知識とコードの考え方を結びつけていったのです。

現在、ピアノ指導者を対象とした伴奏法とアレンジの講座を行なっています(次頁参照)。「コードは分かっているけど、おしゃれな伴奏付けやアレンジができない」という方が一般的には多いです。しかし自分では分かっているつもりでも、即興伴奏やアレンジという以前にもっと基本的なことが身についていないケースが多々あります。そこでまずはコードをしっかり使えるようになること。それから色々なリズムの体験、アンサンブルの経験をすることも大切です。

コードを使えるというのは、理論が分かると同時に、コードネームを見たときに反射的に自分の指の形が作れることです。それがある程度できるようになったら、アレンジに進みます。アレンジは易しい曲の伴奏付けからスタートし、それを変奏曲や連弾にしたり、ポップス調にしたりします。

コードの基礎を覚えるのに3ヶ月から半年、実際に応用できるようになるには1~2年かかります。3~4年以上続けている方は、ピアノ・ソロだけではなく、

連弾や弾き語り、アンサンブルのアレンジ等、それぞれの 人の発想力やレッスンでの必要性に応じて範囲を広げて います。

—コードの知識をクラシックに生かすことはできますか?

コード進行特有と思われている要素、たとえば代理コードやテンション等は、既にブルグミュラーでも見られます。 和声とコード進行はアプローチこそ違いますが、根本は同じと考えてよいでしょう。

講座では、まず初歩段階でバイエルのコード付けをします。その後コード進行がひと通り終わったら、ブルグミュラーにコードネームをつけてみます。バイエルからブルグミュラーに移ると、難易度がぐんと上がります(下記参照)。ドミソ、ファラド、ソシレ等の形でコードがわかっても、実際の音楽の中では常にそのような形で出てくるわけではありません。「実際の音楽の中で、コードの知識をどう結びつけるのか」が難しいところですが、こうした応用力がつけばコードは大変便利です。講座ではさらに、ベートーヴェンやショパンなどにもコードネームをつけて分析していきます。

こういう種類の和音で構成されているという全体構造が理解できれば、初見や暗譜も一音一音にとらわることがなくなります。分析しながら弾くと、「何となく良い」と思っていたのが、「音の重ね方がこうだから響きが美しい」という確信が持てるようになります。





▲橋本先生の講座では、初級から中級にかけてバイエルやブルグミュラーのコード付けを行う。一見平易に見えるブルグミュラーでも初心者にとっては難しい。



# バイエルからショパン までコード付け!

# [Let's Try!] 楽曲分析のもう一つのアプローチ

橋本晃一先生が隔週で行っているアレンジの講座 (ドレミ楽譜出版社内) を取材させて頂いた。コード付けの基礎から始まり、伴奏付け (リハーモナイズ)、アレンジと、段階を踏んで編曲の応用力をつけていく。 受講生はほとんどがピアノの先生で、日常のピアノレッスンに大いに生かしているそうだ。

## バイエルからブルグミュラーまで(初・中級)



各自の個性が感じられる「ぶんぶんぶん」のリハーモナイズ。発想力豊かな伴奏には、はっとさせられる。左下はパッヘルベルのカノンを組み合わせた橋本先生の連弾アレンジのセコンド・パート。

o Lil granti Li Cranti di Giri



### ●簡単な曲の伴奏付けも、十人十色

49

中級コースは受講開始から半年~1年くらいの受講生が対象。毎回伴奏付けやアレンジの宿題が出され、講座当日に先生から細かい講評を頂く。この日は「ぶんぶんぶん」のリハーモナイズを各自が発表。ソロ、デュオ、アンサンブル等、形式は自由。主要三和音をメインに構成したもの、循環コード、経過和音等を使ったもの等、各自の個性が出る。「アレンジを聴くと、だいたいどのような音楽体験を経てきたかが分かります」と橋本先生。

また講座では毎回Dominant Motionのテストを行う。コードネームと指の形が同時に頭に入っていないと、正確に打鍵できない。最後はミュージックデータに合わせて、全員でラテンの曲を演奏。「タッタタッチ・ではなく、ダァ、ダァ・とトランペットで空気を吹き込む感じ」。こうして頭と体で、様々なリズムを体感していく。

One Point

# もはやクラシック奏者も必須! 便利なコード進行

諫山 降美(音楽評論家)

コードネームのシステムはとても便利であるにもかかわらず、トニカやドミナントなどの"機能"を表現しないために、 音楽大学等ではあまり教えられていないようです。音楽作品の構造を把握するのに和声機能を理解することは必須で すが、通常用いられる記号が複雑で、わかりやすくはない欠点があるかも知れません。

その点和声を学ぶ導入として、コードネームを利用するのは適切な方法ではないでしょうか。コードネームは和音の 構成音だけを表すので、比較的わかりやすく多くの訓練を必要としないでしょう。そのため小中学生から和音の構成音 を認識するのに便利でしょうし、大いに活用したいところです。

## モーツァルトからショパンまで(上級)



▲「コードは楽曲を理解する指針になるもので、曲の起承転結が明確に分かるようになりました。暗譜もしやすくなりましたね。」(千代田明子先生・ピティナ指導者会員)

# ●ショパンのワルツにコード付け

マスターコースは上級コースを修了した方が、さらに実力を磨くために受講する講座。受講生は5名で、中には10年目の方も。この日はショパン「華麗なる大円舞曲」につけたコードネームの答え合わせから。受講生の1人が自分の解答を読み上げていくが、さすがにベテランとあって和音を正確に捉えている。「ショパンは徐音が多いので、ベースの動きと大きな流れを捉えるのが大切です」と先生より講評。これまでの講座で、モーツァルトのトルコ行進曲やベートーヴェンの月光ソナタ、チャイコフスキー等の曲にもコード付けしたそうた。コードの考え方は20世紀に生まれたものだが、19世紀以前のクラシックにも十分応用できることが分かる。

### ●ソロ・アンサンブル等、自由自在にアレンジ

次に受講生各自が編曲してきた作品を発表。このレベルになると、 ヴォーカル曲のボサノバ調ピアノアレンジ、管弦楽とのアンサンブ ルなど、アレンジの仕方も自由自在だ。

「まだ片手でしか弾けない息子さんと一緒に連弾したい、というお父さんのご希望に応えられるアンサンブルを編曲した」という受講生 が、クラリネットとドラムを交えたアンサンブルを発表した。橋本先生より「ピアノに違う楽器を加える場合はハーモニーだけではなく、管楽器の音色や音域も考えなくてはいけませんね。また一つのフレーズに対して、様々なアーティキュレーションの選択肢を持つとよいでしょう。管楽器特有のタンギングを入れるとか。」と、ピアノの感覚で書いてしまいがちな点が指摘された。

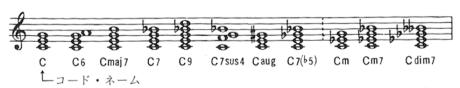
またボサノバ調のアレンジ作品に対しては、素材選びの難しさに言及。ゆったりしたボサノバ調に、はたして16分音符のシンコペーションによる原曲が合うのか。リズムと曲の調和について考えさせられる内容であった。







ピアノ指導者は、コードネームの記号を覚えることよりも、コードネームのシステムと音楽大学などで学ぶ和声記号のシステムとの違いを認識し、それぞれの特徴に合ったシーンで使い分けができること、またその違いを説明できることの方が重要であり、必須の能力ではないかと思われます。



コードネームの一例 ②出典:「音楽中辞典」(音楽之友社)



# バッハ七変化! もできる編曲の妙技

# [Let's Try!] クラシック・ポピュラーを自在に行き来する

クラシックもポピュラーもラテンも、自在に弾き分ける丹内真弓先生。生徒のリクエストに応じて、編曲も多くこなす。今回はJ.S.バッハのインベンション第4番の冒頭4小節を、7つのリズムパターンでアレンジして頂いた。クラシック、ポピュラーを自由にクロスオーバーできるのは、それぞれの時代様式や作曲家の特徴を的確にとらえているからこそ、できる技なのである。

**<古典風>**モーツアルトソナタをイメージしてみました。



**<ロマン風>**ショパンのノクターンをイメージしてみました。



**<ラテン>**民族音楽色豊かな音楽全般にわたって使われる名称です。 このアレンジはルンパ (キューバの伝統音楽) タイプです。 大きな2つのりで



One Point

# 様々なリズムのパターンを蓄積 丹内真弓先生(ピアニスト、作曲・編曲家)



アレンジする際は、各ジャンルがもつ特有のリズムや個性に上手く合わせるように心がけます。例えば ブルグミュラーの 1 番「やさしい花」はボサノバ、4番「進歩」はラテン、「貴婦人の乗馬」をジャズ風に アレンジして「スィングする貴婦人の乗馬」にしたことがあります。日頃から色々な音楽を聴いたり、アン サンブルやコンチェルトをしていますが、様々なリズムのパターンをストックしておくことが大切ですね。

アレンジは、様々な制約や条件の中でいかに自由に目的に合った音楽にするかです。左手と右1本の ためのアレンジ「さくら」を編曲したことがありますが、右1本では聞こえないアレンジを目指しました。

ジャンルにこだわらず、「その人の音楽」と可能性が広がるようなアレンジを追求したいと思います。

# 編曲で広がるレッスンの可能性

**<8ビート>**ポピュラーの基本リズムとして重要。本来は音楽ジャンルとは関係なく4拍子で8分音符をビートの基本単位とするリズムの事。このアレンジは「冬のソナタ」のイメージです。



**<ジャズワルツ>**スウィングする三拍子をジャズワルツといいます。 スウィングするコツは一拍を三連で感じることです。

※∏=Ĵ♪ スウィングして



**<タンゴ>**19世紀の初期にスペイン系の舞曲とアフリカ系の民族音楽が混ざり合ってアルゼンチンで出来た音楽といわれています。



<ボサノバ>ポルトガル語で新しい感覚とか新しい傾向という意味で、19世紀初頭にブラジル民族音楽サンバとジャズの感覚が影響しあって出来たものです。



# あとがき

生徒のニーズが多様化するにしたがって、指導者にも柔軟な対応が求められるようになった。ソロ曲を教えるだけでもレッスンとしては十分成立するのだが、指導者のアイディアでさらに様々な音楽体験を生徒に提案することができる。編曲とは、ただ原曲の形をかえて易しくしたり、クラシックをポップス調にアレンジしたり、というだけではなく、ピアノの独奏曲に他楽器をあわせて響きの重なり方を学んだり、変化に富んだ伴奏付けをすることによって様々な和音のパターンを知ったり、一つのフレーズを色々なリズムで弾きわけてリズムパターンを覚えたり、といった多様なニーズに応えることができる。編曲には、「生徒にこれを学ばせたい」という強いモチベーションと明確な目的があるのだ。「今、生徒に何を与えればよいか」と考えた結果、その目的にぴったり合った楽譜や教材がみつからない —— そのような場合は、編曲で応じてみてはいかがだろうか。

取材·構成◎菅野恵理子